

『千年の眠り花』

著：沙野風結子

ill：小路龍流

「『余興』の準備が整いました。懐かしい人に会えますよ」

「懐かしい人？」

今回の被害者(ターゲット)は、誰なのか。蒼は難しい顔になる。零飛の余興は、血なまぐさいことか卑猥なことかのどちらかと決まっている。

港区のマンションに帰り着き、リビングへと入っていった蒼はしかし、ソファにだらしない姿勢で座る少年を目にして、思わず顔を緩めた。

「ウー」

呼びかけると、少年はだるそうに瞬きしながら、蒼のほうを見た。

耳や項が隠れる長さの髪は淡く脱色されており、髪のないところから覗く耳には片側だけで三つもピアスが嵌めてある。七分袖のTシャツに黒いベスト、ブラックジーンズの腰にはウォレットチェーンが引っ掛けてある。

渋谷あたりの同年代のなかにいればごく自然に紛れてしまうだろうが、彼は日本人ではない。

それどころか、ある意味、どこの国の人間でもない。生まれは中国だが、そこに彼の戸籍はない。

一人っ子政策によって第二子以降が生まれた場合、親は罰金を払わなければならない、その罰金すら払えないときには生まれた子は存在ごと伏せられることになる。そんな黒孩子(ヘイハイズ)は当然、義務教育もまともな医療も受けられず、結婚も就職もままならない。最下層の生活を送ることを余儀なくされる。

戸籍がないだけに黒孩子の正確な人数は、それこそ国家ですら掌握できない状況だ。年々その数は増え、現在では三千万人とも四千万人とも言われている。十三億人から成る巨大すぎる龍の尾の先から、そういう者たちは振り落とされていく。

ウーのように幼くして黒社会に属すようになり、海外に流れ着く者は数えきれない。

黒い芽は国境を越えて、どこでもしたたかに蔓延る。

彼らは他者によって守られ、生かされるという感覚を知らない。自分の力と嗅覚を頼りに、生き抜くしかないのだ。

蒼のあとから入ってきた零飛の姿を目にしたとたん、ウーの顔は見るからに強張った。咄嗟に自身の首を掌で隠すように押さえながら立ち上がる。

「また背が伸びましたね。年はいくつになりましたか？」

「……六」

「聞こえませんか」

「十六」

零飛に正面から見据えられて、掠れぎみの声が詰まる。

——あれから、もう四年か…。

ウーの痛々しい過去へと思い馳せつつも、蒼は疑問をいなく。

去年日本に来た際に一度会っているから、ウーとはおよそ一年ぶりだ。「懐かしい

人」という表現はしっくりこない。

「幫の仕事がないがしろにして、血なまぐさいトラブルばかり起こしているそうですね」
「……」

零飛が歩み寄ると、ウーはいっそうきつく喉を押さえた。まるで自分で自分の首を絞めているみたいだ。

「日本警察による海外の犯罪組織対策の網が強化されているいま、無駄に目立つのは、組織の迷惑にしかありません」

ウーが大きな目を三白眼にし、下唇を捲るように突き出す。

「——だって、退屈で」

「仕事内容が、ですか？」

「でかい抗争もないし、密入国者の世話とかつまんないのばっかで……そんなのじゃ、足りない。全然、足りない」

身の内刻一刻と膨れ上がるどす黒いエネルギーを持って余している様子、少年は苦しげに身動きする。

ウーは子供のころから奇術師のようなナイフ捌きの腕をもっていた。また、善悪という基準に価値を置かず、目的を遂げるためなら手段を選ばない。

黒社会の人材としては、望ましい資質だ。

零飛はすっと手を伸ばすと、ウーの手首を掴んだ。首から手を引き剥がす。剥がされまいと爪を立てたせいで、少年の首の皮膚にはいくつもの蚯蚓腫れが刻まれた。

「それでは、退屈がり屋な君に、たまらない愉しみを与えてあげましょう」

ウーを連れて歩きだす。零飛はすれ違いざま、蒼に流し目についてくるようにと命じた。

——悪趣味の始まりか…。

苦い表情で、蒼はふたりのあとに続いた。

中庭に面した廊下を通過して北西のエリアへ向かった時点で、今朝方マンション内を検めたときにひとつだけ開かない扉があったことを思い出す。

案の定、零飛はその扉の前に立った。

レトロな真鍮の鍵をノブの下の鍵穴へと差し込む。暗いモス色の壁紙にゴシック調の家具で調えられた部屋が現れる。ペチカの周りには化粧タイルが細やかに組まれ、二メートル四方ほどある鏡が古典絵画向きの装飾過多な額縁に嵌められて壁にかけられている。

その大きな鏡の前へと、零飛はウーを導いた。蒼も少し離れた後方に立つ。三人の姿がっすりとした面に映し出されている。

零飛はスーツのポケットからクレジットカードほどの大きさのコントローラーを取り出すと、その表面を右手の親指で押した。

次の瞬間、鏡のなかから三人の姿が消えた。シックな部屋も消え失せる。

代わりに額縁のなかに現れたものは——。

「……あ？」

喘ぐような音が、ウーの唇から漏れる。

マジックミラーの向こう側に現れた部屋は、壁一面に正方形の防音パネルがぎっしりと貼りつけられた無機質な空間だった。床は薄水色のリノリウムで、中央に質素な鉄パイプの寝台が据えられている。

真っ白いシーツにきっちりとマットレスを包まれたベッドは、祭壇を思わせた。

その祭壇のうえに、男がひとり仰向けに横たわっている。裸で、下半身には薄手の白い毛布がかけてある。肢体の脱力しきった様子はずでに命がないもののようにも見えたと、よくよく観察すればその胸はゆっくりと上下の動きを繰り返していた。

こちらの優美な空間とあちらの殺伐とした空間とは、隣接しているのが信じられないほどに調和を欠く。

向こう側に部屋があるというより、命ある絵が飾られているような不気味さを、蒼は覚えた。

「零飛、彼は？」

顎を深く引いているため、顔立ちがよくわからない。蒼が尋ねたのとほぼ同時に、ウーが体当たりする勢いでミラーに張りついた。

「なんで……っ……」

ベッドの男を掴み取ろうとするかのように、少年の指先に白く力が籠もる。

「なんで、イツキがっ」

「イツキ——？」

蒼は見開いた目で零飛を見た。

「亜南、斎？」

「懐かしい人でしょう？」

蒼を驚かすことに成功したのが嬉しいらしく、零飛が眉を上げる。しかしそれとは反比例して、蒼の顔からは血の気が失せた。

零飛の腕をきつく掴む。

「たかが余興のために、警視庁の刑事を拉致したのか」

亜南斎は外国人組織犯罪専門の部署所属で、しかも彼のパートナーの鷹羽征一は中国黒社会でも名を知られているほど有能な刑事だ。

「このぐらいの刺激がなければ余興になりません」

零飛は涼しい顔で蒼を退けると、ウーの手に紙を握らせた。

「君に仕事を与えます。日本に滞在している盟真人材有限公司の虞総経理の居場所を調べなさい。中間報告や連絡は、その紙にある蒼の携帯電話に入れるように」

「……」

「三日後の二十四時までに捜し出せなければ、斎には命を落としてもらうこととなります」

亜南斎に釘づけだったウーの目が、勢いよく零飛へと向けられる。少年の目は狂おしい想いに充血していた。

無理もない。亜南斎はウーにとって、唯一無二の特別な存在なのだ。

四年前、斎はウーを黒社会から救い出そうとした。結局、ウーはみずからの適性が黒社会にあることを自覚して斎の手を退けたが、十二歳の子供の心に消えることのない情愛が刻まれたのは確かだった。

「もし虞を捜し出せたら、その時は斎に触らせてあげましょう」

「斎に……触れる？」

「この四年間、遠くから彼を見つめてきたのでしょうか。しかし、ただ見つめるだけで満足できるほど、君はもう子供ではない」

匂わされた性的な意味合いに、少年の頬が染まる。

「俺は——俺は、齋を汚したりしないっ…」

零飛が舐める視線を齋へと向けた。

先刻より顎がわずかに上げられ、その毅然と整った面立ちが晒されている。

「彼も、もう三十になりましたか。相変わらずサムライといった風情ですね。むしろ以前より魅力的でそそられます」

「い、齋に変なことをするなっ」

「それは君次第です。どうしますか？」

ウーの眉が大きく波を描いて歪む。ふっくらした下唇を噛んでから、少年は部屋を飛び出していった。

本文 p30～38 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>